（続紙　１）

京都大学	博士（　教育学　）	氏名	尹　秀安
論文題目	帝国日本と英語・英文学		

（論文内容の要旨）

本論文は、戦前期の日本において英語・英文学がどのような意味を持ち、どのように教えられたのかという問題を、帝国主義的な価値観やナショナリズムとの関わりにおいて検討したものである。具体的には、戦前期英語教育界の重鎮であった岡倉由三郎（東京高等師範学校教授）を中心的な対象としながら、岡倉の執筆した英語教科書、受験用英語雑誌、岡倉らの監修した『英文学叢書』、植民地朝鮮における英語教育、京城帝国大学における英文学講座教授佐藤清、および佐藤の弟子である朝鮮人文学者崔載瑞の英文学論というように多岐にわたる対象をとりあげている。

第1章では、岡倉由三郎の英語教育論の根底に政治的・社会的地位の強い人間集団の言語を学ぶべきとする道具主義的な言語観が存在することを明らかにした上で、岡倉が中学校向けに執筆した英語教科書『The Globe Readers』（1907）および『The Ocean Readers』（1925）を分析した。他の著者による英語教科書と比較して岡倉の英語教科書はイギリスのインド支配や南アフリカ支配などの事象について具体的に論究することで、「大英帝国」の偉大さを追認した上で、日本でも帝国主義的な価値観を広めようとする志向が顕著であることを明らかにした。また、同じ岡倉執筆の教科書でも、1900年代の教科書では日本が「アジアのイギリス」であるべきという認識の下にもっぱらイギリス人の観点からアジアやアメリカを描く一方、1920年代の教科書では第一次世界大戦後の世界情勢の変化を反映してアメリカの重要性についても一定の言及と配慮が見られることを指摘した。

第2章では、帝国日本を担うエリート予備軍にとって英語とはどのような位置を占めていたのかという問いを、月刊受験雑誌『英語研究』を通じて明らかにした。この雑誌は高等学校などへの受験準備のための英語教材を中心として編集されたものであり、プラクティカルな目的を備えたメディアだからこそ英語をめぐる価値観が率直に表れているとみなしうることをまず確認している。その上で、第一次世界大戦後の「時事英語」欄の分析を通じて、日本の台湾植民地支配を肯定する主張もまたアメリカ人の語りという形式で掲載されている事実などに、西洋によって承認されたいという後進帝国日本の欲望が端的に表明されていることを指摘した。さらに、「時事英語」欄に反米的と解釈できる論説も掲載されたことに着目した上で、もっぱら反米的な主張を強調すれば英語教育の根拠を否定することになりかねないというジレンマが存在したと論じた。

第3章では、岡倉由三郎・市河三喜監修の『英文学叢書』（1921年～1932年）を取り上げ、英語教育の教材とされた「英文学」の内実を検討した。『英文学叢書』全100巻の特徴は、第一に大部分がイギリスの作品で構成されており、アメリカ文学はほとんど取り上げていないこと、第二に同時代のイギリスにおける英文学評価に従うという方針にもかかわらず、実際には当時のイギリスでの評価と食い違う選択をしていることである。すなわち、イギリスでは17世紀以前の古典を重視したにもかかわらず、『英文学叢書』ではシェークスピア以外は古典はほとんど採用していない、他方で「帝国文学」の開拓者として知られたキプリング、

（続紙　２　）

およびキプリングの継承者とされたコンラッドの作品を含んでいることである。岡倉にとって、「文学上の印度の発見」を可能にしたキプリング、「文学的な植民地者」コンラッドを英文学叢書に含める意味は、テキスト空間において物理的「距離」を飛び越えて「文学上の朝鮮、台湾」を所有する行為において先進帝国イギリスを模倣しようとすることであったと論じた。

以上のように、戦前期の英語・英文学研究が後進帝国日本の欲望と密接に結びついていたことを明らかにした第3章までの論述をふまえ、第4章・第5章では現実の朝鮮植民地支配の状況に即して、英語・英文学の備えていた政治的・社会的意味について論じた。

第4章では、朝鮮における英語・英文学の意味にかかわってまず京城帝国大学に英語英文学講座が設置された理由について検討した。三・一独立運動後の朝鮮では日本を介在せずに世界の覇権を握る欧米から直接的に文化を輸入するために英語を学ぶべきだという気運が高まっており、総督府としてはこうした動向を牽制するために英語英文学講座を設置せざるをえなかったと論じた。次いで、英語英文学講座の主任教授に就任した佐藤清の英文学観について論じ、佐藤がアイルランド文芸復興の担い手たるイェーツに着目して「ケルト民族の苦悩と憧憬」に共感し、英国のアイルランド支配に対して批判的な意識を抱いていたことを指摘し、京城帝国大学赴任後も詩作という形で批判的な英文学理解を実践に移したことを明らかにした。

第5章では、佐藤の弟子であり、植民地朝鮮の代表的な英文学者であった崔載瑞の文学観を通じて、英文学が帝国主義批判の武器として機能する可能性について検討した。崔載瑞は自律的な朝鮮文学の発展のために、革命運動にかかわった詩人シェリーや、植民地人の言論の自由を主張した文学者フォースター、さらにイェーツの詩を紹介、こうした英文学者の発言を通じて、当時朝鮮がおかれた状況を間接的に批判していた。崔は、作家と民衆が共に「文明の陶酔」を経験できる朝鮮文学を創造することを目指していたが、1939年頃を境として「批評的自我」を自ら抹殺し国策文学の推進の旗を振ることになるなった。そこには、国策に従う民衆という一面的なイメージに囚われて、多様な民衆の姿を把握できていなかったという問題が存在した。ただし、崔は「批評的自我」を自ら抹殺した後でも、朝鮮の言語や土地にこだわり続け、朝鮮文学を創造する夢は棄てようとしなかったと論じた。

以上のような分析を通じて、帝国日本において英語・英文学の占めた両義性が明確となった。岡倉由三郎が「英文学」を通じて創造しようとした「日本精神」とは、英文学に体現された帝国主義的精神の普遍性を帯びたものであった。これに対して、崔載瑞において英文学から学ばれるべき普遍性とは国家を超越する人格と自由の重要さであり、自己自身の政治的文化的な責任を担う「批判精神」を意味した。帝国日本の言語・教育にかかわる従来の研究は、対象としては「国語」としての日本語をめぐる問題に偏り、ともすれば日本のナショナリズムをもっぱら非合理主義的な国粋主義という観点から問題化する傾向が強かったのに対して、本論文では岡倉のような「普遍性」志向のナショナリズムがはらんだ問題点を分析の俎上に載せることの重要性を明確にした。

注）論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は１頁を３８字×３６行で作成し、合わせて、３，０００字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、４００～１，１００wordsで作成し審査結の要旨は日本語５００～２，０００字程度で作成すること。

（続紙　３　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文の意義は、まずその着眼点におけるユニークさに見出すことができる。戦前期の英語教育に関する従来の研究は、教授法論的な関心からなされたものが多かった。教授法研究は重要だとしても、「何を目的として英語を教えるのか」という目的論の次元をめぐる考察を深めるためには歴史的アプローチを必要とする。それにもかかわらず、こうした観点から英語教育史に焦点をあてた研究は、きわめて少なかった。他方、英文学研究の領域では本論文の問題意識と通底する研究も存在するものの、研究手法という点では個々の作家あるいは作品に着目した作品論的分析が大半を占めてきた。これに対して、本論文では教育史的観点を導入することにより、英語・英文学をめぐる帝国主義的な価値観をより一般化された次元で分析することに成功している。この場合の教育史的な観点とは、①本論文の中心的な研究対象である岡倉由三郎が中等教員養成の総本山である高等師範学校の教授であり、中学校向け英語教科書を執筆していたことへの着眼、②エリート青年を購読者とする受験雑誌『英語青年』の分析、③旧制高等学校など高等教育機関のテキストとしての『英文学叢書』の検討として具体化されている。こうした教育史的観点の導入により、作品論的分析を乗り越えると同時に、帝国主義的価値観の内面化をめぐる問題を当時の青年の「立身出世」願望と結びつけて解釈する糸口を示した点も本論文の功績といえる。

第二に、本論文のもうひとつの大きな功績は、帝国日本の植民地とされた朝鮮における英語・英文学をめぐる状況についての比較検討を行ったことである。岡倉由三郎のような日本人英文学者と崔載瑞のような朝鮮人英文学者では、一言で英文学といっても、着眼のあり方に決定的な差異があることを本論文では明らかにした。しかも、エドワード・サイードが『文化と帝国主義』において重要な位置づけを与えたキプリング、コンラッド、イェーツのような作家たちが、帝国日本における英文学研究においても重要な評価の分かれ目となることを本論文では解明した。それは、「文化と帝国主義」をめぐるサイードの枠組みが帝国日本の研究にも適用できることを証明したものとして重要といえる。さらに、一口で英文学と言っても、イギリス文学とアメリカ文学との相違があり、イギリス文学と総称されるものの中にもアイルランド、スコットランド、ウェールズの言語や文学が存在し、その評価に帝国主義をめぐる問題が先鋭に表れることも本論文では明らかにした。このように本論文では、日本や朝鮮はいうまでもなく、アイルランド、ウェールズ、インド、南アフリカなど従来の教育史研究の世界では無視されがちな地域をめぐる問題にまで多角的な観点から分析の射程を及ぼしている。教育史研究の領域では「日本」「東洋」「西洋」という三分法的な世界の捉え方の不十分さが指摘されて久しいにもかかわらず、以前としてこの枠組みに止まる研究も多い状況において、本論文は英語・英文学を媒介として教育史研究における「世界」イメージの射程を広げる意義を持っている。

第三に、帝国主義やナショナリズムという主題にかかわる従来の歴史学研究がともすれば戦前期のナショナリズムを非合理的な国粋主義という概念で一面的に描いてしまう傾向があったのに対して、本論文は、いわば帝国という「普遍性」を志向するナショナリズムのあり方を岡倉由三郎という対象に即して描き出したという特徴がある。その際に、ポスト・コロニアリズムと総称される研究動向もよく咀嚼しながら、「普遍性」の質を吟味することの必要性を明確に示した点で、本論文は重要な問題提起を行っているといえる。

（続紙　４　）

もとより、本論文に残された課題も少なくない。

ひとつは構成上のアンバランスともいうべき問題である。日本本国の英語・英文学を対象とした第1章～第3章においては教育史的な観点を導入し、英語教科書や受験英語雑誌の分析も行っているが、植民地支配下の朝鮮を対象とした第4章・第5章は佐藤清と崔載瑞という二人の英文学者をめぐる動向に焦点化している。朝鮮で独自に発行された英語教科書や受験英語雑誌がこれまでの調査の限りでは存在しない以上、これは対象の性格に由来する、やむをえない偏りともいえる側面がある。ただし、朝鮮の専門学校における英語のカリキュラムやテキストなど、この点についてさらなる調査研究がまったく不可能なわけではない。さらに構成上のアンバランスという点に関して、第2章の受験英語雑誌の分析が1920年代に限定されており、1930年代から40年代の雑誌の分析がなされていないことが惜しまれるという指摘もなされた。

また、口頭試問の中では、崔載瑞とともに日本の朝鮮植民地支配に疑問を抱いていた英文学者佐藤清が、当時の英文学研究の中枢に位置した岡倉由三郎とどのような関係にあったのかという質問がなされた。この点については新たな資料の提示を含めて今後の研究の発展の方向性を示唆する回答がなされた。

構成上のアンバランスという問題を含めて、口頭試問の中で執筆者自身がその問題点をよく自覚していることが確認できた上に、これらの問題点は主に形式的なことであり、本論文の学問的価値を損なうものではないと認められた。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成２３年　２月　１６日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降